

静岡市灰溶融炉の運転状況

情報公開資料（8月3日請求、8月16日公開）よりの分析

2006年9月14日

作成「コミロサン静岡」市民ネットワーク 壺阪道也

図1 静岡市灰溶融炉 投入量グラフ（04年4月～7月 05年1月～06年7月）

点一つが一日の灰溶融炉への投入量 単位トン 3番目のグラフが1号炉2号炉の合計投入量

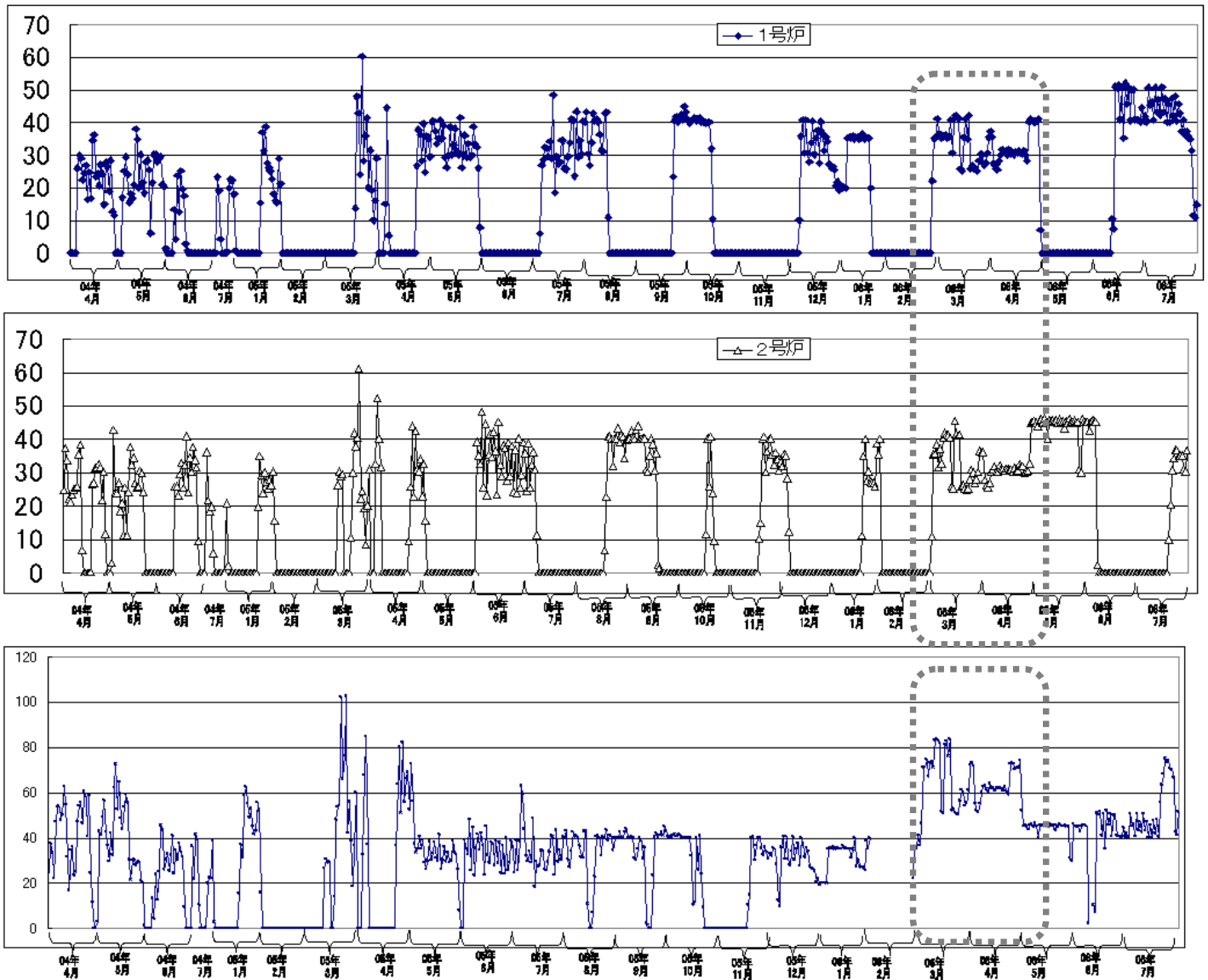
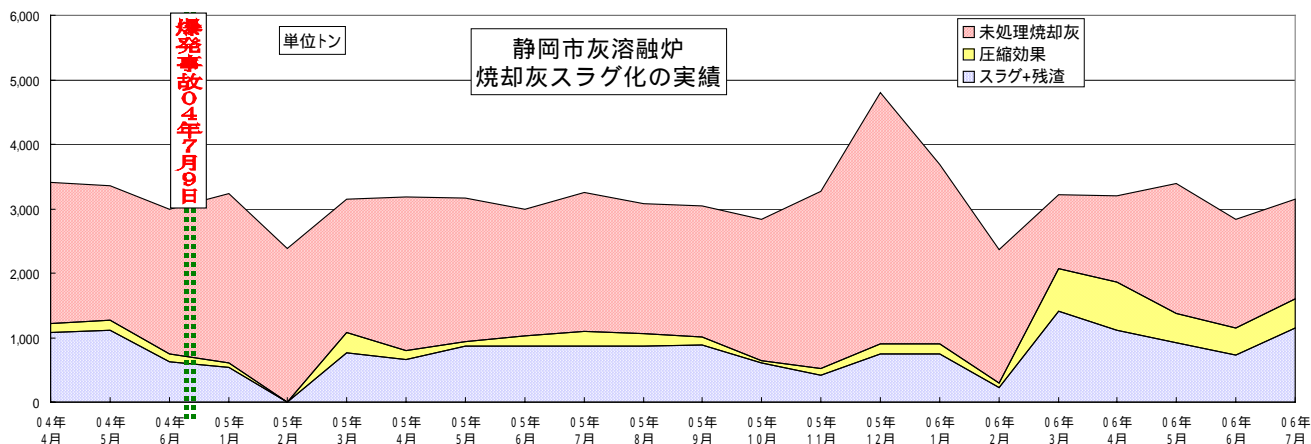
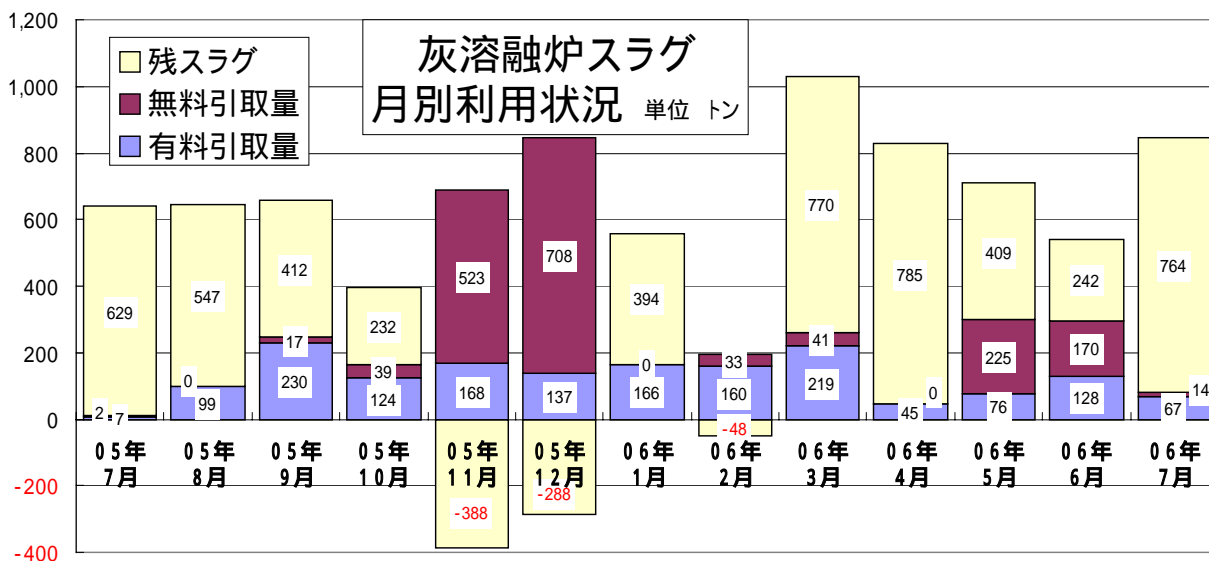


図2 月別灰投入量と未投入 = 未処理焼却灰量



特徴1 今年、3～4月に1、2号炉の初めての同時運転。しかし、その後止めた。以前よりは一日の投入量・処理量が増えているが、処理能力（1日120t）の半分も操業していないのが実態。何らかの欠陥を抱えているのだろうか？（図1、2参照）

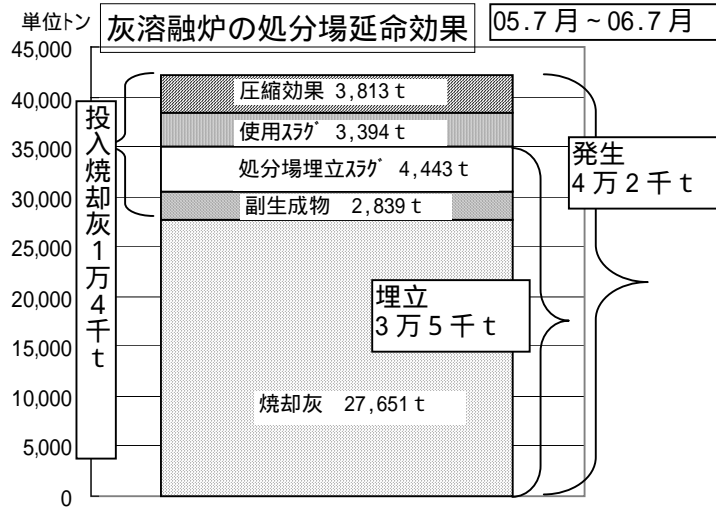
図3 月別スラグ利用状況 05年11月、12月は生成スラグ以上に引き取り量が多かった分のマイナスで残スラグ量とした。 有料引取り料金 = 209円/トン



特徴2 昨年7月からスラグの公共事業への使用が始まったが、有料引取りもタダ同然の全量無料引き取りが現状。昨年の11月、12月に集中的に利用されていることから、無理矢理、使用していることが推測される。（図3参照）安全性は別に、スラグが路盤材などに砂利の代用になりうるのかも疑問。残りのスラグは、沼上最終処分場に積み上げられているが、処分場も穴に埋めていく段階から、積み上げる段階になっており、スラグを積み上げるは普通の焼却灰より扱いにくいという話しも聞いたことがある。とにかく生成された7,836tのスラグ中3,394tが使われた。（43%の使用率）

特徴3 05年7月から06年7月までに静岡市は42,139 tの焼却灰が発生し、結局処分場で34,932t が埋め立てられた。差し引き7,207 tの処分場延命効果があったと言える。(図2、図4 参照)

図4 灰溶融炉の処分場延命効果



特徴4 1年1ヶ月で558,675,251円のコスト。(図5、図7参照)

投入量7リ 3万9千円/t 処理量7リ 4万9千円/t (投入量、処理量の意味は図8参照)

7,207t ÷ 14% = 51,479t (ごみを焼却すると約14%の焼却灰になる...静岡市平均)

つまり、7,207 tの焼却灰の減量は51,479 tの焼却ゴミ減量したことに相当。

51,479t ÷ 396日 ÷ 702,278人 = 186g/日人

これは、市民一人一日7リ 186 g減量効果に相当する。04年度静岡市 657g/日人ですので

657-186=471g/日人 04年度東京多摩地区平均(469 g/日人)に匹敵します。

市民を巻き込んでのごみ減量ではなく、爆発リスクも背負いながら5億円以上使って、多摩地区並の処分場に減らしたことをどうみるべきだろう。

いずれにせよ、多少の延命にはなっていないが最終処分場問題は解決していない。別の最終処分場はいずれにせよ、造らざるを得ない

図5 05年7月~6年7月 静岡市灰溶融炉運転経費 合計5億5867万円

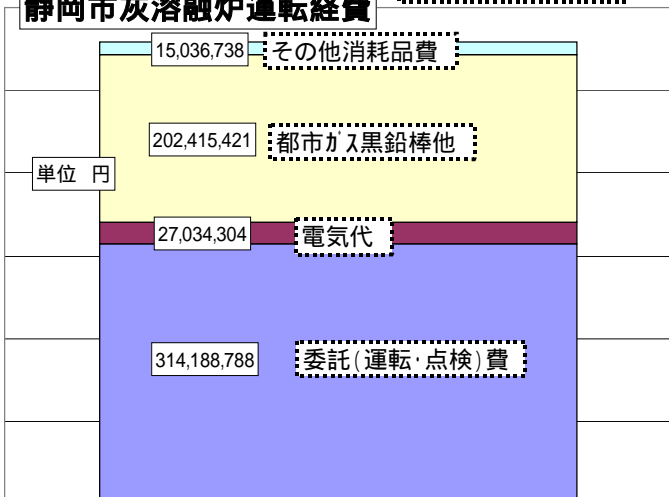
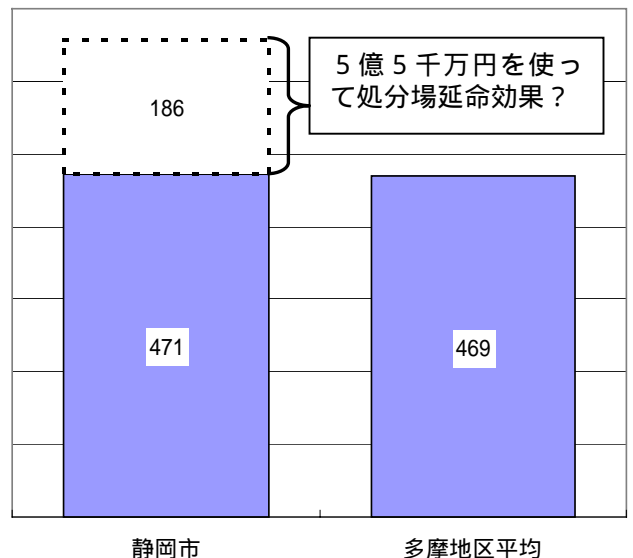


図6 焼却ゴミ一人一日7リ 比較(04年度) 単位 g/日人



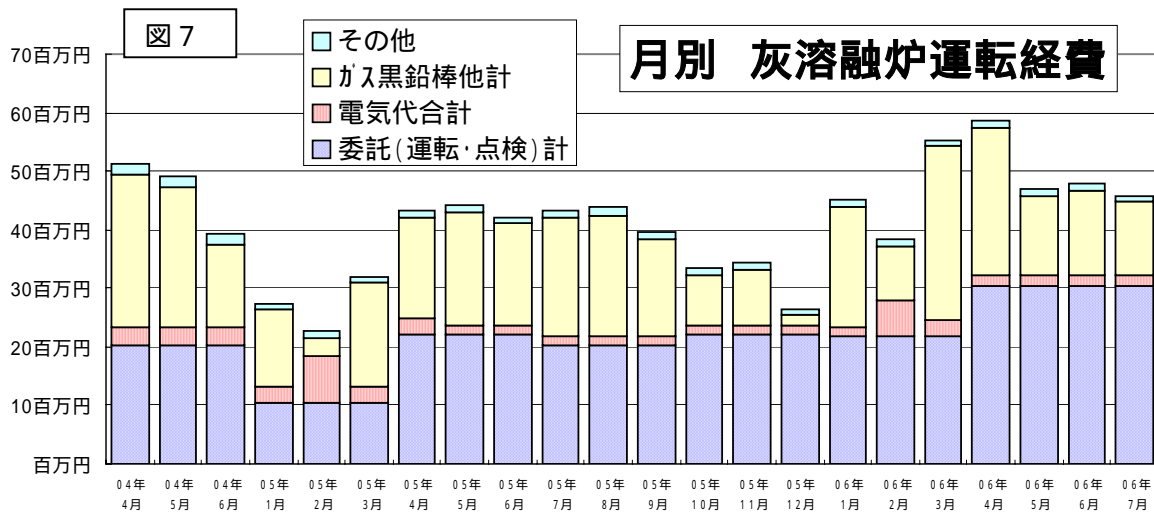


図8 灰溶融炉 流れ図

